

硬X線集光偏光計XL-Calibur気球実験の 2021年フライトへ向けた準備状況

高橋 弘充 (広大) , Quin Abarr^A, 栗木 久光^B, Richard Bose^A, Dana Braun^A, Gialuigi de Geronimo^C, Paul Dowkontt^A, 榎戸 輝揚^D, Manel Errando^A, 深沢 泰司^E, Tom Gadson^F, Victor Guarino^A, 郡司 修一^G, 林田 清^H, 早藤 麻美^I, Scott Heatwole^F, 石田 学^J, Fabian Kislak^K, Mozsi Kiss^L, 北口 貴雄^I, Henric Krawczynski^A, Nirmal Kumar Iyer^L, Rakhee Kushwah^L, James Lanzi^F, Shaorui Li^M, Lindsey Lisalda^A, 前田 良知^J, 松本 浩典^H, Joe McGee^F, 宮澤 拓也^N, 水野 恒史^E, 岡島 崇^O, Mark Pearce^L, Zachary Peterson^F, Brian Rauch^A, Felix Ryde^L, 斎藤 芳隆^J, Garry Simburger^A, David Stuchlik^F, 玉川 徹^I, 田村 啓輔^P, 常深 博^H, 堤 まりな^Q, 内田 和海^E, 内山 慶祐^Q, Andrew West^A, 周 圓輝^Q, X-Caliburチーム

A: WUSTL, B: 愛媛大, C: SUNY, D: 京大, E: 広大, F: Wallops/NASA, G: 山形大, H: 阪大, I: 理研, J: ISAS/JAXA, K: UNH, L: KTH, M: BNL, N: OIST, O: GSFC/NASA, P: 名大, Q: 東京理科大



日米瑞の国際協力

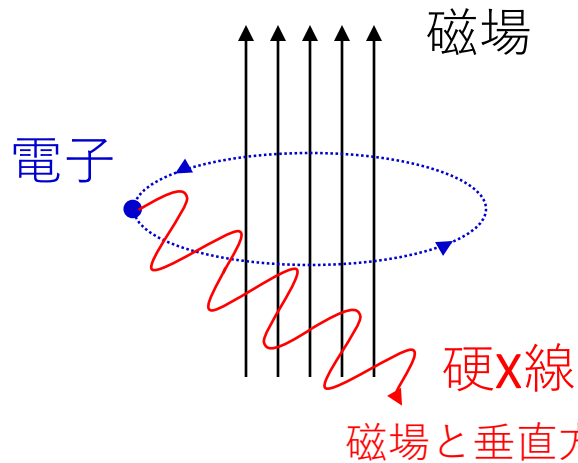
PI: Henric Krawczynski
(ワシントン大学)





偏光から分かること(1): 磁場

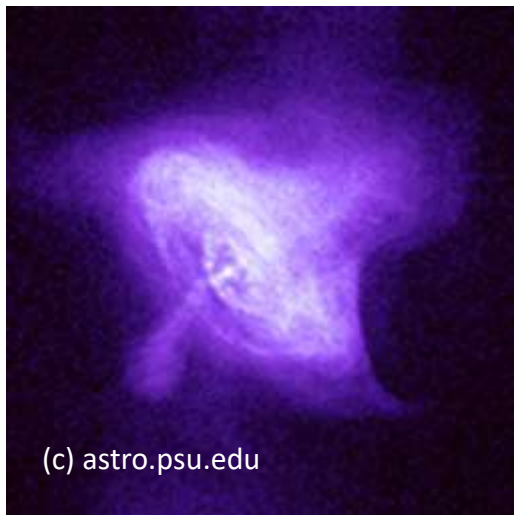
電子 + 磁場 => シンクロトロン放射



高エネルギー粒子が磁場に巻き付いて放射
⇒ 放射の偏光の方向は、磁場と垂直

粒子加速の現場、ジェットなど

パルサー星雲 「かに星雲」



粒子を高エネルギーに加速するためには、
磁場が重要な役割を担っている
磁場は、イメージ、時間変動、エネルギーでは
測定できない

⇒ 偏光情報なら、磁場の向きと揃い具合を
調べられる

PoGO+の結果： Chauvin et al. 2017



偏光から分かること(2):反射

反射・散乱した光 (水面、大気、その他なんでも)



左：普通に撮影
右：偏光フィルターで
偏光した光をカット
反射光がなくなり、
川底からの光のみになる
=> 偏光情報から
反射体の配置が分かる

ブラックホール連星系「はくちょう座X-1 (Cyg X-1)」



相手の恒星からの放射がどのように
ブラックホールに吸い込まれているのか？
=> ブラックホール近傍 ~100 kmは
イメージでは構造が識別できない
=> 偏光なら、(ミクロな) 反射体の
配置が分かる

PoGO+の結果：Chauvin et al. 2018



偏光から分かること(3):強磁場

強磁場中性子星のごく近傍（表面付近）でのQED効果

強磁場中で、E-mode偏光は透過しやすい \Leftrightarrow O-mode偏光は吸収されてしまう

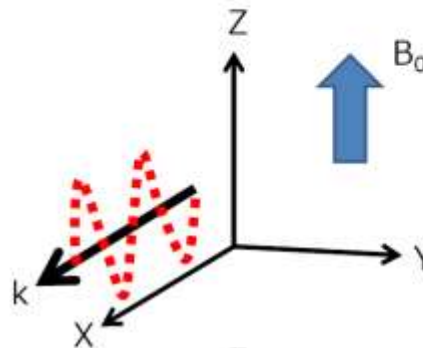
Pavlov et al. 2000

Yatabe et al. 2017

Polarization Eigenmodes

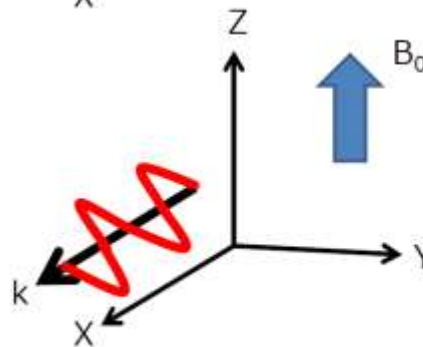
Ordinary Mode
(O-mode)

$E // k - B_0$ plane



Extraordinary Mode
(E-mode)

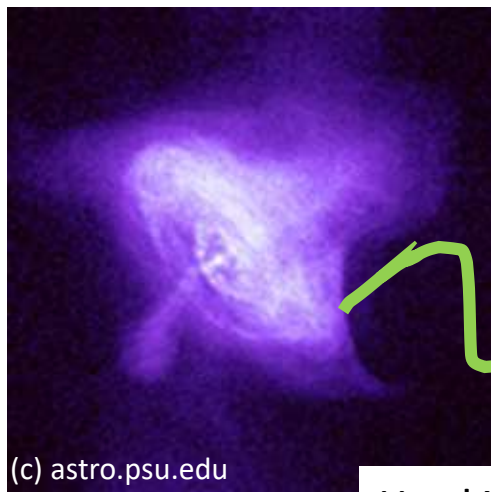
$E \perp k - B_0$ plane





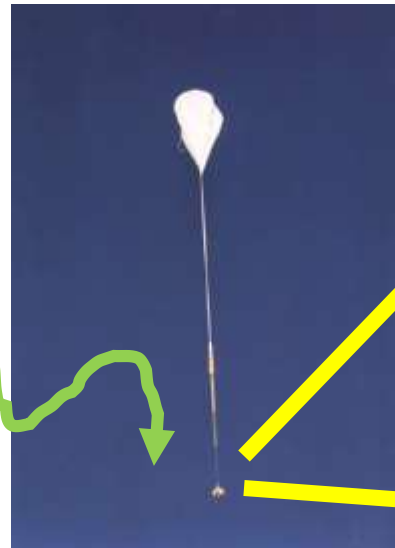
X線・ガンマ線 偏光観測

- **偏光**測定（イメージ、タイミング、スペクトルとは異なる情報）
=> パルサーやブラックホール、活動銀河核、ガンマ線バーストなどにおける高エネルギー現象の研究で重要
- しかしながら、**X線・ガンマ線の偏光が検出された天体は、ガンマ線バースト、かに星雲**（2.6/5.2 keV と 200 keV 以上）と **Cyg X-1**（600 keV 以上）のみ
- 他のエネルギー帯域、他の天体の偏光観測が必要不可欠
PoGO+, X-Calibur, 「ひとみ」SGD, AstroSat, IXPE, XPP...

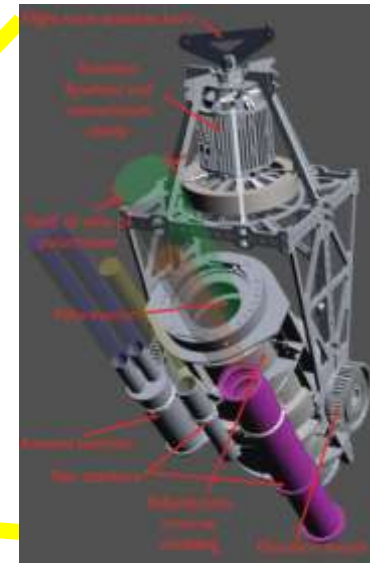


(c) astro.psu.edu

Hard X-ray
(>20 keV)



~40 km



Weight (wo ballast) : ~2000 kg



高エネルギー偏光観測の歴史と今後

1970年代

2000

現在

X線

OSO-8

IXPE(2021 -)

XPP
計画

硬X線

PoGO+ (2013, 2016)

日本+スウェーデン

X(L)-Calibur(2018, 2021, 2022, ...)

元々アメリカのみ

日本+スウェーデンも参加

ガンマ線

ひとみSGD (2015)

INTEGRAL (2003 -)

AstroSat (2015 -)

偏光結果を報告しているが、
偏光観測に特化しておらず
系統誤差が大きい

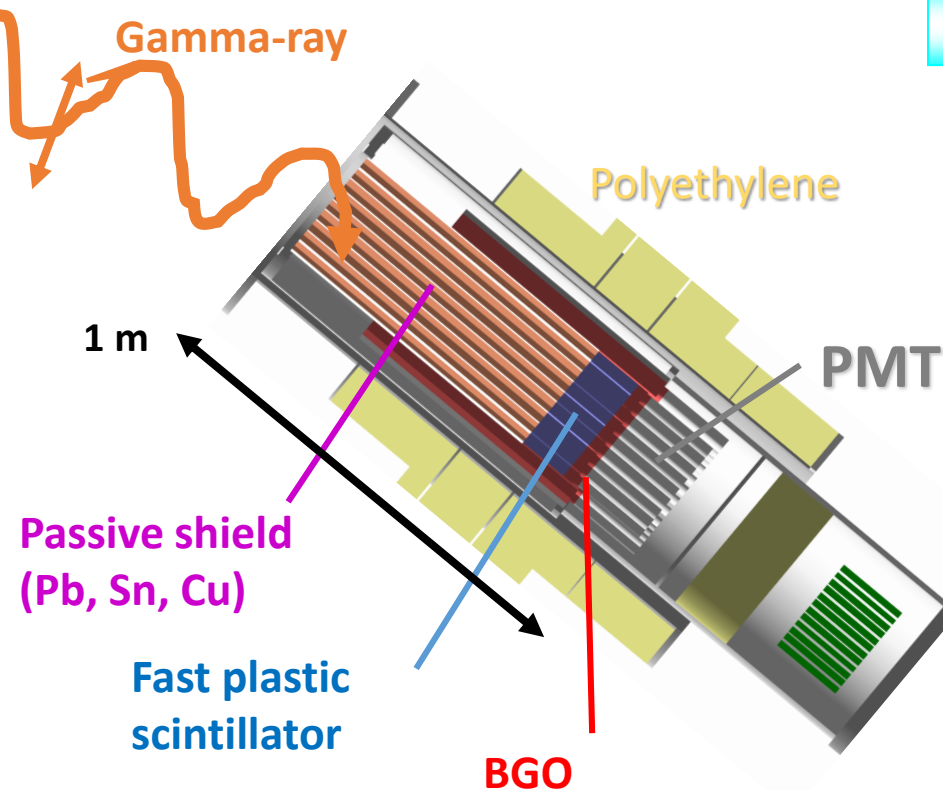
ガンマ線バースト観測用の小型検出器 (GAP, POLAR) は除く



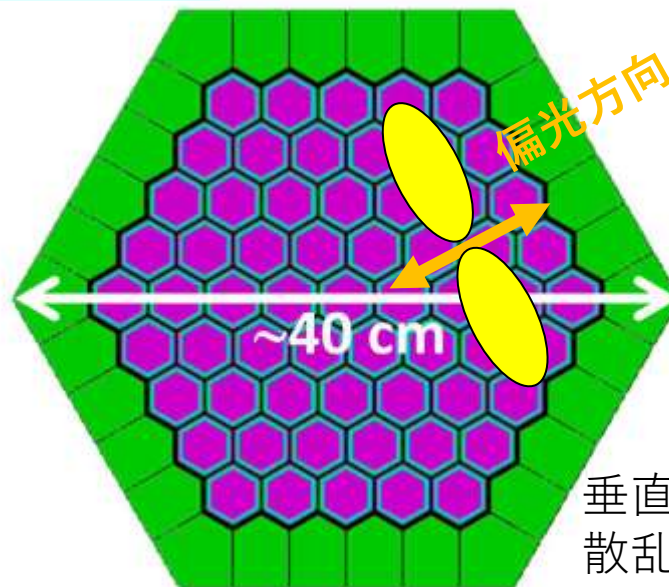
PoGO+偏光計(コリメータ型)

20-180 keV

- **PoGOLite** では**コンプトン散乱を検出し、その散乱角の異方性から偏光を検出**
主検出部: プラスチック x 61ユニット、周囲にBGOシールド:30ユニット
熱中性子シンチレータ:2ユニット
- 検出器自身の系統誤差、大気中性子フラックスの異方性をキャンセルするため、観測中は検出器が6分で1回転する。



Top view



偏光方位角と直交方向に多くのイベントが検出される



PoGO+偏光計(コリメータ型)

20-180 keV

- PoGO Lite ではコンプトン散乱を検出し、その散乱角の異方性から偏光を検出

主検出部:

熱中性子シ

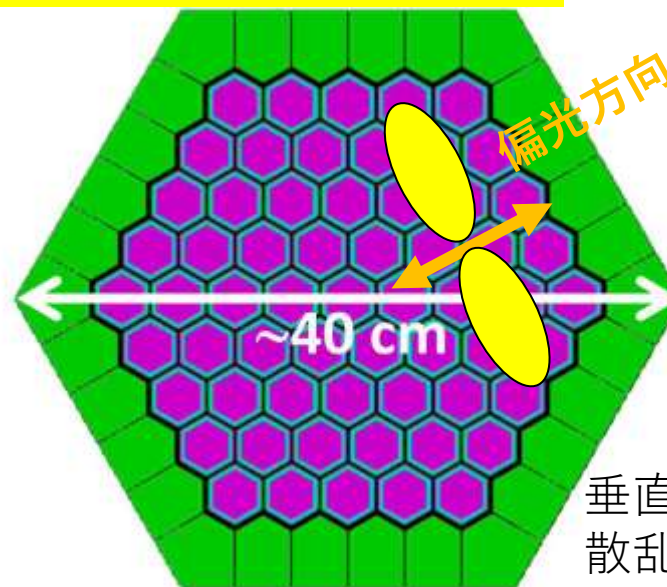
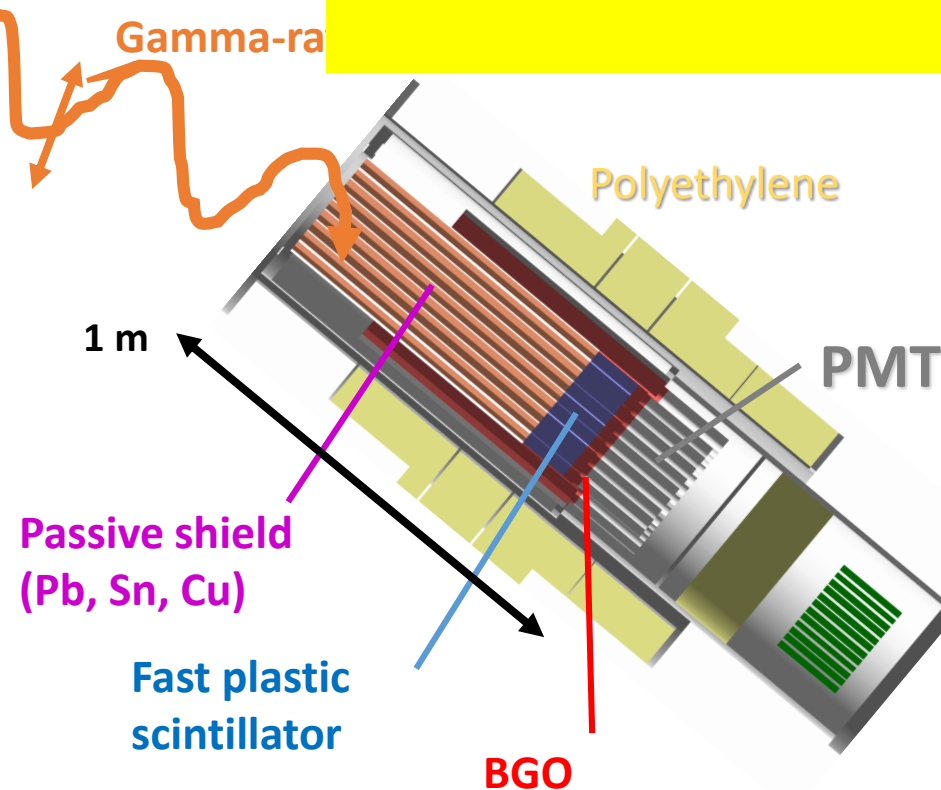
- 検出器自身

観測中は検

1 Crabより暗い天体の観測は難しい
これ以上の感度向上は難しい
⇒ PoGO+の次のフライト計画は未定

ト

セルするため、



垂直方向に散乱されやすい

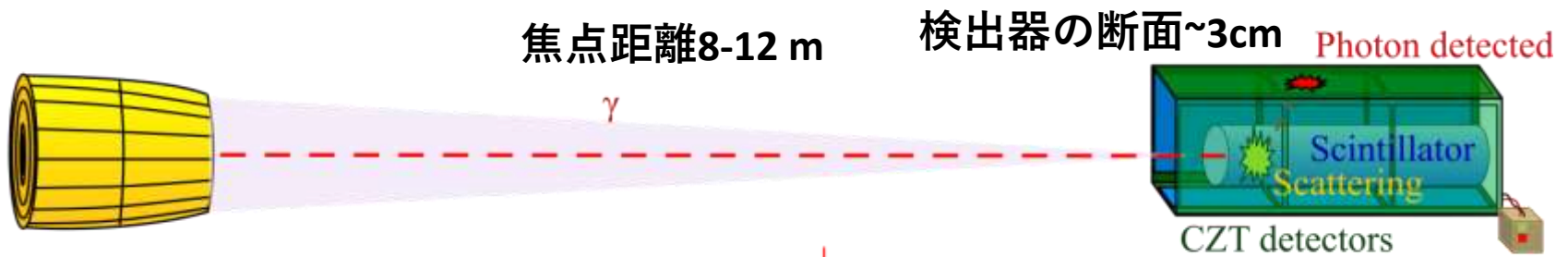
偏光方位角と直交方向に多くのイベントが検出される



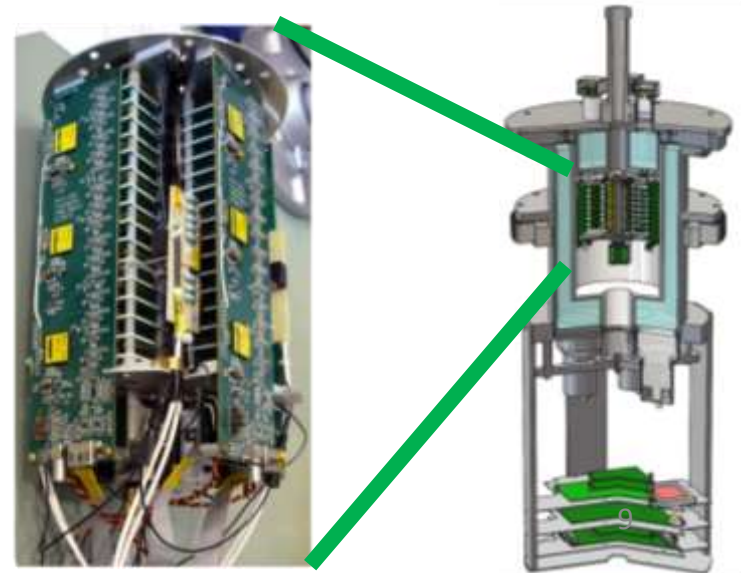
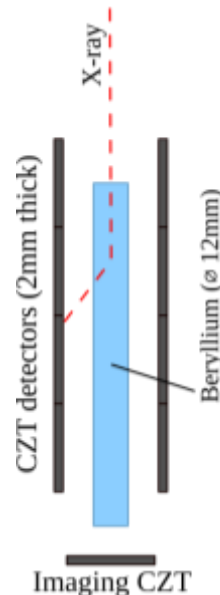
X-Calibur偏光計(集光型)

20-80 keV

- X-Caliburでもコンプトン散乱を検出し、その散乱角の異方性から偏光を検出
硬X線望遠鏡により集光 => 検出器はコンパクト・バックグラウンド低減
主検出部: Beで散乱、CZT x 256ピクセル x 4面、周囲にCsIシールド
最下面に CZT x 64ピクセルで(簡易)イメージング
- 検出器自身の系統誤差をキャンセルするため、検出器が20秒で1回転する。



2018年: InFOCuS望遠鏡 (NASA+日本)
2021年以降: FFAST望遠鏡 (日本)





X-Calibur偏光計(集光型)

20-80 keV

- X-Caliburでもコンプトン散乱を検出し、その散乱角の異方性から偏光を検出
- 硬X線望遠鏡
- 主検出部: 検出器自身
- 最下面にCZT検出器が配置されている。
- 検出器自身は検出器の軸を回す。回転する。

数100 mCrabの天体からも偏光検出

焦点距離8-12 m

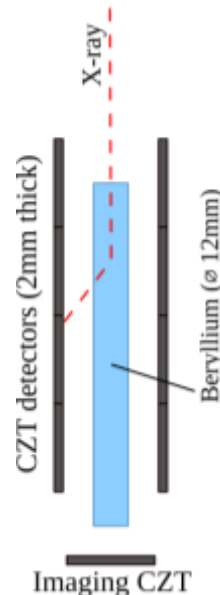
検出器の断面~3cm

Photon detected



2018年: InFOCuS望遠鏡 (NASA+日本)

2021年以降: FFAST望遠鏡 (日本)





2018年X-Calibur 全体像 (~2トン)





X-Calibur放球@南極(2018/12/30)

YouTube : X-Calibur Launch



2018年X-Caliburフライト履歴

放球：12/30 9:15AM (LT)

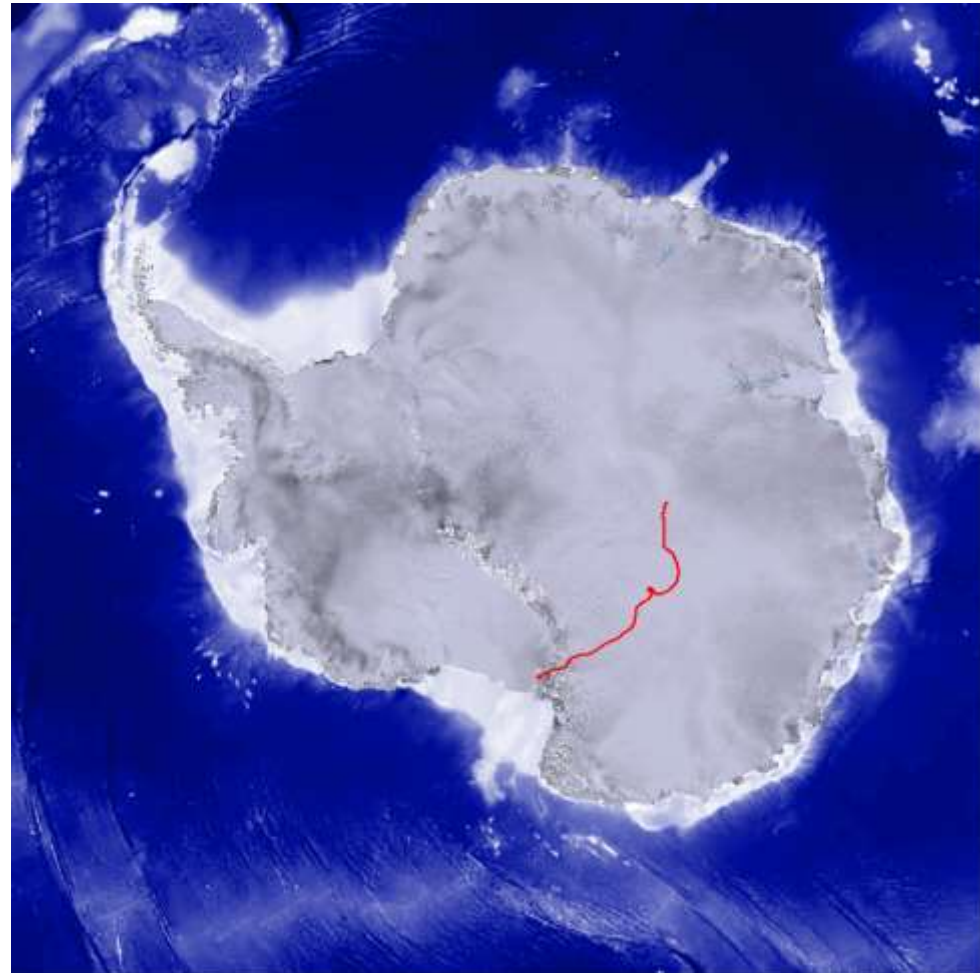
高度：40 kmに到達

観測天体：質量降着型パルサー
GX 301-2, Vela X-1 (南天)
GX 301-2 は 600 mCrab

姿勢制御：1秒角以下の高精度

着陸：1/2 11:40AM (LT)
He漏れのため

⇒ データ解析 (論文投稿中)
次回フライトを目指す





質量降着型パルサーの放射モデル

West, Wolfram, & Becker

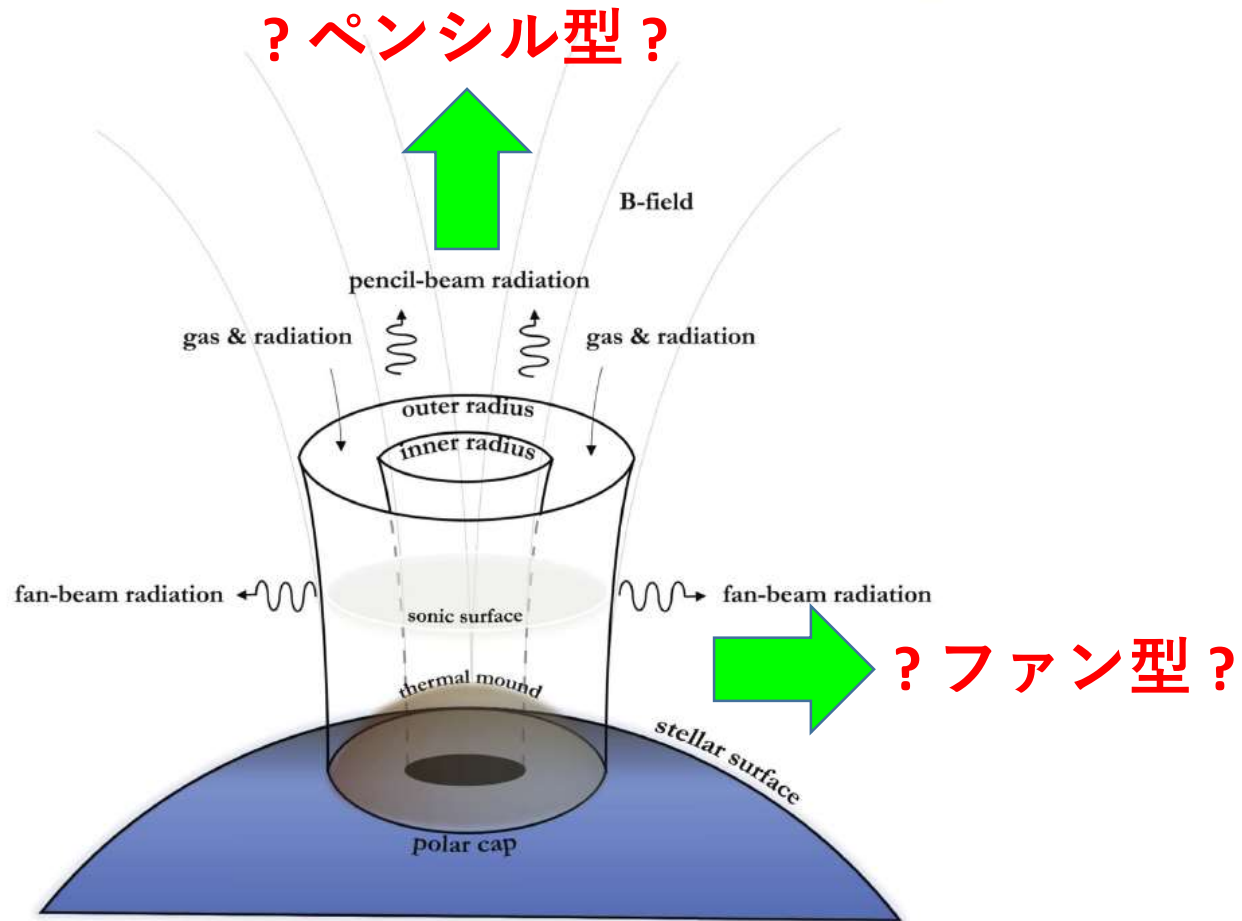


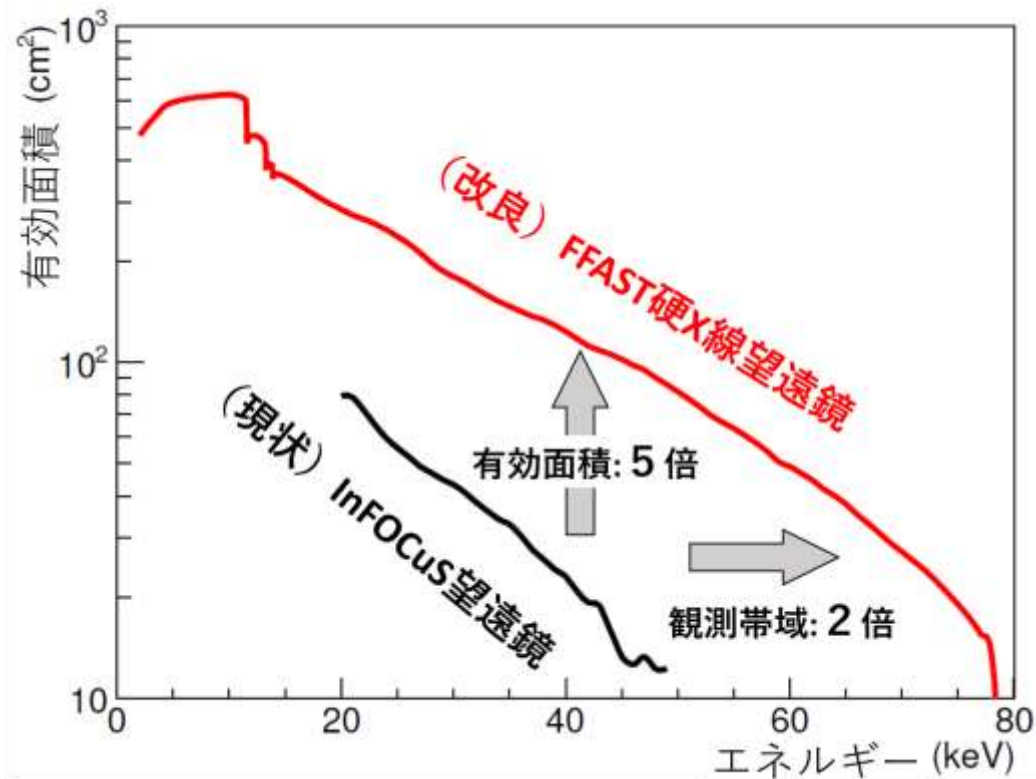
Figure 1. Accretion column formation in the two-fluid model. Ions and electrons enter at the top of the column as coupled and interacting fluids. X-ray photons are produced in the column and escape through the top and the sides as pencil and fan-beam components, respectively. Also indicated are the thermal mound surface (where the absorption optical depth in the parallel direction equals unity, $\tau_{\parallel}^{\text{abs}} = 1$), and the radiation sonic surface, where the radiation Mach number $\mathcal{M}_r = 1$.



次回フライトXL-Calibur(2021,2022, 2024, ...)

(1) FFAST望遠鏡 (すでに製作済み) を利用

ひとみHXT望遠鏡と同性能 => 天体信号を5倍以上増やせる



(2) CZT半導体検出器

2018年2mm厚を0.8mm厚に薄くする => バックグラウンド 1/2.5低減

S/N比を10倍向上させ、スウェーデン/南極でのフライトを計画



XL-Caliburの準備状況

2018年着陸後



- ・ 偏光計：回収して動作チェック済み
=> 次回フライトへ利用

その他（望遠鏡、トラス）は来年回収

- ・ 望遠鏡：次回フライトは**FFAST望遠鏡**
(日本担当)

FFAST望遠鏡（「ひとみ」HXTと同等）

反射鏡

- ・ すべての反射鏡 (213 x 3 x 2枚) は
インストール済み

- ・ NASAの提案が採択
- ・ 日本側でも宇宙研の
小規模プロジェクトに採択

アライメントバー

- ・ 試作品(1/3)を置換するため、製作中
- ・ 置換後にSPring-8の放射光で
位置合わせ、校正実験（2020年）

⇒ 2021年夏スウェーデン
その後2022, 2024年に
再フライト
(IXPE衛星とも同時観測)



まとめ

- X(L)-Caliburは、日米欧の国際協力による硬X線偏光計である。
- 硬X線望遠鏡で集光することにより、コンパクトな偏光計で低バックグラウンドで高感度な観測を実現する。
- 2018年12月の南極フライトでは、偏光観測にとっては新しい天体種族（質量降着型パルサー）を観測した。
- フライトが3日間だったため、観測結果は上限値。
- 次回フライトは、2021, 2022, 2024年にスウェーデンと南極から計画しており、FFAST望遠鏡を利用、CZT検出器を薄くすることで、S/N比を10倍向上させる。

